

平成23年度「成長分野等における中核的専門人材養成の戦略的推進事業」

食・農林水産分野産学コンソーシアムの進捗状況【報告】

コンソーシアム代表機関
公立大学法人 高崎経済大学

1. 事業目的

衰弱するわが国の農業・農村の活力を取り戻すためには、農村地域に新たなアグリビジネスを創出することが不可欠である。だが、新たなアグリビジネスの担い手を確保・育成するための体系化された教育・研修プログラムと、それを運営する組織体の整備は遅れている。特に、時代が要請する農商工連携や6次産業化を進めるための能力(マーケティング、マネジメント、コラボレーション等)開発プログラムについては、これまで教育機関や農業関連企業・団体に断片的に行われてきた農業教育・研修では対応できない部分が多い。これからのアグリビジネスを担う人材を確保・育成するためには、そのプラットフォームとなる産学連携組織体と、それぞれの関係機関の強みを活かした学習システムの構築が欠かせない。

上記の目的を実現するため、本事業は、①食農分野における産学コンソーシアムを形成すること、②食農分野におけるモデル・カリキュラム基準や達成度評価手法等の開発・実証を行うこと、の2点に取り組む。

2. 事業内容

上記の目的を果たすため、本事業では下記の案件に取り組む。

- ①食農分野における産学コンソーシアム「食と農を結ぶ産学コンソーシアム」(食農コンソーシアム)の形成に向けた研究および協議
- ②食農分野におけるモデル・カリキュラム基準や達成度評価手法等の開発
- ③内閣府が進めるキャリア段位制度「食の6次産業化プロデューサー」と連動したモデル・カリキュラム基準等の研究・開発

なお、6次産業化までを見据えたモデル・カリキュラム基準の開発にあたって、その根幹となる能力群のイメージを下記の図に示した。ビジネスを展開していくうえで、消費者や実需者、関係機関、提携先等との対話や交流は欠かせない。異業種との連携を考えた場合、コーディネート力やコラボレート力が必要となる。しかし、それらの能力は、他者を理解し友好関係を築くためのコミュニケーション力やビジネスの持続と成長に不可欠な見込み客を集め続けるためのマーケティング力、効率的な経営を行なうために必要なマネジメント力の上に成り立つものである。モデル・カリキュラム基準では、ビジネスに必要な中核的な能力を、学習者のレベルや学習環境に応じて、段階的・断続的に学ぶことができるような「学習ユニット積み上げ方式」を取り入れることを検討している。

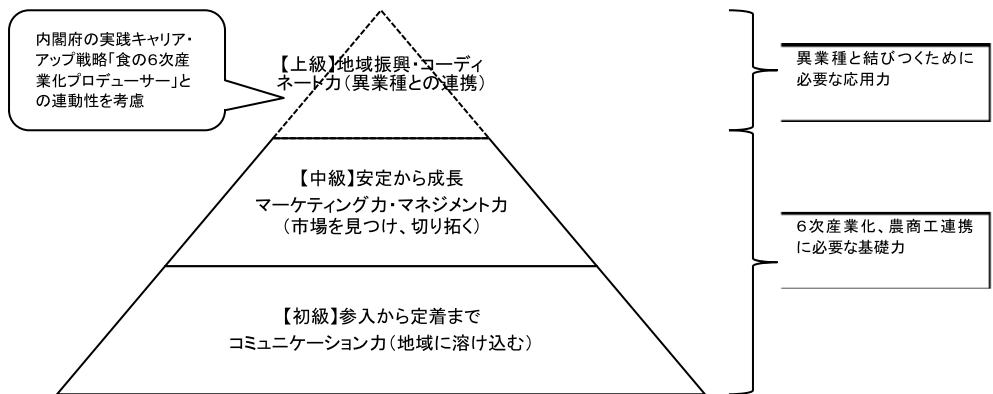
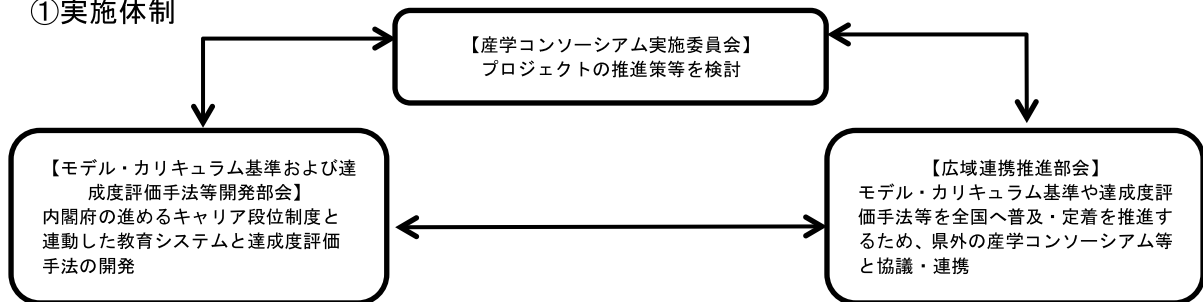


図 高度アグリビジネス人材および6次産業化人材に必要な能力群と関連性

3. 産学コンソーシアムの構成員・構成機関等

本事業は、下記の実施体制で取り組んでいる。また、産学コンソーシアムの構成機関等については下記に示した通りである。

①実施体制



②産学コンソーシアムの構成機関

| 構成機関(学校・団体・機関等)の名称 | | 役割等 | 都道府県名 |
|--------------------|------------------|----------------------------|-------|
| 1 | 高崎経済大学 | 実施委員会、広域連携推進部会、教育プログラム開発部会 | 群馬県 |
| 2 | 有坂中央学園グループ | 実施委員会、教育プログラム開発部会 | 同上 |
| 3 | 桐生大学短期大学部 | 実施委員会、教育プログラム開発部会 | 同上 |
| 4 | 群馬県立農林大学校 | 実施委員会、教育プログラム開発部会 | 同上 |
| 5 | 群馬県立勢多農林高等学校 | 実施委員会、教育プログラム開発部会 | 同上 |
| 6 | (株)群馬中央総合研究所 | 実施委員会、教育プログラム開発部会 | 同上 |
| 7 | 群馬県中小企業団体中央会 | 実施委員会 | 同上 |
| 8 | 全国農業協同組合連合会群馬県本部 | 実施委員会、教育プログラム開発部会 | 同上 |
| 9 | カネコ種苗株式会社 | 実施委員会 | 同上 |
| 10 | (社)群馬県商工会議所連合会 | 実施委員会 | 同上 |
| 11 | 群馬県農業協同組合中央会 | 実施委員会 | 同上 |
| 12 | くらぶち草の会 | 実施委員会、教育プログラム開発部会 | 同上 |
| 13 | 高崎食品リサイクルループ協議会 | 実施委員会 | 同上 |
| 14 | 有限会社竹内園芸(群馬農場) | 実施委員会 | 同上 |
| 15 | (株)野菜くらぶ | 実施委員会 | 同上 |
| 16 | グリーンリーフ株式会社 | 実施委員会 | 同上 |
| 17 | (株)アイエーフーズグループ | 実施委員会、広域連携推進部会 | 同上 |
| 18 | ジョブカフェぐんま | 実施委員会 | 同上 |

| 構成機関(学校・団体・機関等)の名称 | 役割等 | 都道府県名 |
|------------------------|----------------|-------|
| 19 財団法人群馬県観光国際協会 | 実施委員会 | 同上 |
| 20 一般財団法人地域公共人材開発機構 | 実施委員会、広域連携推進部会 | 京都府 |
| 21 やまがた6次産業ビジネススクール | 実施委員会、広域連携推進部会 | 山形県 |
| 22 認定NPO法人ふるさと回帰支援センター | 実施委員会、広域連携推進部会 | 東京都 |
| 23 株式会社農林中金総合研究所 | 実施委員会 | 同上 |

③産学コンソーシアムの下部組織

| 広域連携推進部会 | | | |
|-----------------------------|--------------------------|-----|-------|
| 氏名 | 所属・職名 | 役割等 | 都道府県名 |
| 大宮登 | 高崎経済大学 副学長 | 部会長 | 群馬県 |
| 小沢亙 | 山形大学 教授 | 委員 | 山形県 |
| 白石克孝 | 龍谷大学 政策学部長 | 委員 | 京都府 |
| 高橋公 | 認定NPO法人ふるさと回帰支援センター 専務理事 | 委員 | 東京都 |
| 大泉一貫 | 宮城大学 副学長 | 委員 | 宮城県 |
| 黒澤賢治 | (株)アイエーフーズグループ 相談役 | 委員 | 群馬県 |
| モデル・カリキュラム基準および達成度評価手法等開発部会 | | | |
| 村山元展 | 高崎経済大学 地域政策学部 学部長 | 部会長 | 群馬県 |
| 渋谷襄 | 中央農業グリーン専門学校 学校長 | 委員 | 同上 |
| 中島君恵 | 桐生大学短期大学部生活科学科 学科長 | 委員 | 同上 |
| 金井達夫 | 群馬県立農林大学校 校長 | 委員 | 同上 |
| 長島英治 | 群馬県立勢多農林高等学校 学校長 | 委員 | 同上 |
| 斎藤潔 | 宇都宮大学農学部 教授 | 委員 | 栃木県 |
| 武藤俊史 | (株)群馬中央総合研究所 主任 | 委員 | 群馬県 |
| 須藤邦彦 | 全国農業協同組合連合会群馬県本部 副本部長 | 委員 | 同上 |
| 池田隆政 | 群馬県農業協同組合中央会 参事 | 委員 | 同上 |
| 小林康宏 | 中央農業グリーン専門学校 副校長 | 委員 | 同上 |
| 市村雅俊 | 高崎経済大学地域政策研究センター 研究員 | 委員 | 同上 |

4. 会議(委員会、分科会等)の開催実績と今後の予定(23年度内)

23年度内における本事業の開催実績と予定については、下記の表の通りである。

| 委員会 | 日時 | 議題 | 参加者 |
|---------------------------|-----------------------------------|---|-------------------------|
| 第1回 合同委員会 | 2011年 11月22日(火) 13:30~15:00 | (1)昨年度実施事業の報告について (2)今年度の事業計画について (3)キックオフシンポジウムの開催について (4)その他 | 7名 |
| 第2回 合同委員会 | 2011年 12月13日(火) 12:00~13:00 | (1)各種調査について (2)その他 | 15名 |
| 第3回 合同委員会 | 2012年 2月28日(火) 13:30~ | (1)調査に関する中間報告について (2)実証講座について (3)群馬県版産学コンソーシアムについて (4)その他 | 14名 (うちオブザーバ ー3名) |
| 成果報告 | 2012年 3月15日(木) | 23年度成果報告書の提出 | — |
| 実証講座実 現のための ワークショップ | 2012年 3月27日(火) | 実践的かつ効果的なカリキュラム開発に向け、入念な準備を行ったため、今年度は実証講座の実施にはいたらなかった。次年度に実証講座を実現するため、各ユニットを、どの教育機関が担当することができるか、各ユニットの具体的な教育内容などについて意見交換会を開催する。 | |

5. アンケート調査やヒアリング調査について

23年度内における本事業の調査実績は、下記の表の通りである。これらの調査結果は、カリキュラム開発や広域連携を進めるためのデータとして有効活用する。

| 視察日 | 視察先 | 視察者 | 視察目的 | 視察成果 |
|---------------|--|----------------------------------|--|---|
| H.23 11/15 | 平成23年度ぐんま農と食の 経営者フォーラム | 市村 | 教育プログラム調査および 農業者調査についての情 報収集 | 農業生産は盛んだが、食品やブ ランド力は弱い |
| 11/24 | 群馬県立中之条高等学校 | 市村 | 教育プログラム調査 食農資格調査 | プロジェクト学習で、地域産業との 連携を強化 |
| 12/4-5 | ①一般財団法人地域公共人 材開発機構、②龍谷大学 | 大宮 村山 市村 | 産学コンソーシアム調査 | EQF 等をモデルとした京都モデル を構築し、実績をあげつつある。 |
| 12/6 | ぐんま県央青果株式会社 | 市村 | 教育プログラム調査につい ての情報収集 | 市場やスーパーのバイヤーの商品 知識が低下 |
| 12/14 | ①長坂牧場、②食の駅高崎 店、③有限会社ファームクラ ブ、④小山農園 | 市村 渡邊(内 閣府) 菅原(文 科省) | 農業者調査 | 6次化に取り組む農業者には、異業 種と交流するための能力が必要。 農業関連産業では、農業経験や 加工技術を持つ人材が不足。 |
| 12/19 | 群馬県農業会議 | 市村 | 農業者調査についての 情報収集 | 県内の6次化は、グループによる 加工が主で、農業者がすべて取組 む例は多くはない。 |
| H.24 1/12 | 同志社大学今出川キャンパ ス | 片岡 市村 | 産学コンソーシアム調査 教育プログラム調査 食農資格調査 | 食農政策士は、COLPU が定める アウトカム表とは厳密に一致しな い。 |
| 1/25 | 群馬県西部農政事務所 | 市村 | 農業者調査、教育プログラ ム調査、産学コンソーシ アム調査についての情報収 集 | 改良普及員も経営指導や6次産業 化への指導も進めているが、法人 等の雇用労働者の人材育成には 未対応。 |
| 1/29-31 | ①株式会社舞台ファーム ②やまがた6次産業ビジネス スクール、③いわてアグリフ ロンティアスクール | 大宮 宮田 武藤 市村 | 産学コンソーシアム調査 教育プログラム調査 食農資格調査 農業者調査 | ①農業界には他産業と会話できる 人材がおらず、新時代の農業には これに対応できる人材が必要。 ②プログラム内容は充実している が、財務基盤が弱く、競争的資金 が切れたら事業の継続が難しい。 ③受講生の多様化とレベル低下に より、レベル分けが必要。しかし、 大学校等の調整は進んでいない。 |
| 2/1 | 山梨大学ワイン科学研究セ ンター | 市村 | 産学コンソーシアム調査 教育プログラム調査 食農資格調査 | 事業終了に伴い、事業規模を縮小 し継続。大学と県、酒造組合との 関係は良好。 |
| 2/7-8 | ①金沢大学能登学舎、②信 州大学工学部物質工学科 | 市村 | 産学コンソーシアム調査 教育プログラム調査 食農資格調査 | ①過疎地であるため、ターゲットを 絞りすぎると受講者が集まらな くなるので、間口を広げている。 ②地元食品企業は中小であり、大 手の OEM が主でオリジナル、技術 力が弱い。その問題を解決するた めの人材育成プログラム。 |
| 2/9 | 高知大学農学部 | 市村 | 産学コンソーシアム調査 教育プログラム調査 食農資格調査 | 地域振興計画の中に土佐 FBC に よる人材育成を明記し、産官学の 枠組みで人材育成を進めている。 |
| 2/14 | 東京農業大学オホーツク実 学センター | 市村 | 産学コンソーシアム調査 教育プログラム調査 食農資格調査 | 原料調達、加工、販売までが1つ の大学でパッケージ化されている のが最大の強み。しかし、地域に 食品企業が少なく、開発した技術 |

| 視察日 | 視察先 | 視察者 | 視察目的 | 視察成果 |
|------|---------|------|------------------------------------|---|
| | | | | や商品の受け皿がない。 |
| 2/20 | 佐賀大学農学部 | 大宮市村 | 産学コンソーシアム調査 教育プログラム調査 食農資格調査 | 農業法人の経営者にターゲットを絞り込んだプログラム。実務経験があるので、実習は行わず、演習や課題研究等の思考トレーニングに徹している。 |

6. モデル・カリキュラム基準等について

上記5で示したように、モデル・カリキュラム基準等の開発に向けて、農業者等や食農分野の産学コンソーシアムへのヒアリング調査を実施した。その結果、①6次産業化に必要な能力、②産学コンソーシアムの運営体制やカリキュラム基準等、が明らかになった。

6次産業化に必要な能力のなかで最も重要な能力は、「異業種と会話できる能力」である。市場は価格を通じて農業者に技術力を向上させるシグナルを発する。そのような環境で生き残る農業者を育成するため、既存の農業教育は学習者に技術力を高めさせることを第一に取り組んできた。しかし、農業を「ビジネス」として展開していくためには、消費者や実需者、関係機関、提携先等との対話や交流が不可欠である。高度アグリビジネス人材には、価格以外の情報やネットワークから付加価値の高い経営を生み出すことができる創造的な能力が求められている。

産学コンソーシアムを実質化するためには、人材育成に関して、コンソーシアム加盟機関や関係機関等と連携協定等を締結し、組織の枠組みを構築することが重要なステップとなる。また、多様なバックグラウンドを持つ学習者が相互に学び合うような学習システムを提供することで、学習者は学びの過程で自然と異業種交流を深めていく。今まで出会ったことのない業種との接点が生まれることで、新たな商品やサービスの開発に結びつくことも多々ある。座学ベースで、一方的に知識を習得させるような旧来型の教育ではなく、学びながら異業種とのネットワークが形成されるような実習ベースの教育スタイルが必要である。

上記の調査結果を踏まえ、モデル・カリキュラム基準および達成度評価手法等のイメージ図を作成し、現在検討している段階である。(別添資料参照)

別添資料に記載したモデル・カリキュラム基準および達成度評価手法等は、今年度調査で明らかになった、①大学等が作り上げてきたカリキュラム、②先進農業者・農業関連企業が必要とする人材ニーズを組み合わせたものである。モデル・カリキュラム基準および達成度評価手法等を組むにあたっては、①他大学等の既存カリキュラムや事業運営システムの強みを伸ばし弱みを補うこと、②学校種の枠を超えた連携によってレベルや科目を分担することについて留意した。

先行する大学等のカリキュラムでは、大学が中心となって科目やコースを設計するため、理論構築等の学問的な内容となる傾向がある。しかしながら、実際の受講者は、学歴も職歴も多様であり、全員が同質な能力や経験を持つわけではない。また、1年もしくは2年という規定の期間を通じて科目を受講しないと単位を得ることができないため、労働力に余裕がない中小企業等に勤務する受講生はすべての講義に参加することが難しいこともある。より多くの人々がスキルアップするためには、学習機会の利便性を高める必要がある。そこで、本事業では、①学ぶ側のキャリアパスが見渡せる

体系的な知識・技術が身に付くカリキュラムの開発・設計、②学習者が段階的・断続的に学べるようにカリキュラムをユニット化すること、の2点に取り組む。

また、産官学の枠組みで人材を育成する場合、連携体制が構築されても、実際の教育プログラム運営が機能しないこともある。この問題を克服するためには、関係機関が群馬県の食と農のビジョンや問題を共有し、協力しながら前進していく土壌を築く必要がある。そこで、4つのビジネス系コース(コミュニケーション系、マネジメント系、マーケティング系、プロダクト・プロセス・ロジスティクス系)の他に、群馬県の食と農に関する「群馬オリジナル」コースを設置する。このコースでは、学習者と関係機関が相互に学び合い、協力しながら群馬県の食と農の問題に取り組めるような学習スタイルを想定している。これによって、セクター間にある考えの相違を相互に理解し、協力的に問題解決を行えるようにする。

7. 次年度以降の取組方針

次年度以降は、下記の3点を中心に取組を進める。

①持続的・発展的な機能を備えた産学コンソーシアムの実質化

今年度の調査・検討結果をもとに、中長期的にも実質的に機能する産学コンソーシアムを組織化する。学習者が生涯にわたって学び続けることができる学習機会を提供する場として、次世代の食農産業を支える人材を輩出する場として、継続的かつ効率的に運営可能な産学コンソーシアムの形成は欠かすことができない。学習者に対して学習機会を安定的に提供することができる産学コンソーシアムの運営手法を検討する。

具体的には、食農分野への就業や転職を目指す学習者や他産業従事者、自らのビジネスに6次産業化や農商工連携の要素を取り込み新たな事業展開を目指す食農関連事業者などが、生涯にわたってこの分野でキャリアパスが描けるよう、必要な知識・技術・技能をレベルごとに体系的にユニット化し、それらの積み上げが評価される「学習ユニット積上げ方式」によるアクセスしやすい学習環境の整備を目指す。

また、先行する食農分野の産学コンソーシアムは、学習者のニーズに対応した優れたプログラムをもちながらも、補助事業終了後の自立的な運営については様々な課題を抱えている。次年度は、上記の産学コンソーシアムの実質化に加え、食農分野の産学コンソーシアム間の広域連携によって、各産学コンソーシアムの強み(優れたプログラムを共有化する等)を広げ、弱み(自立的な運営に関する課題等)を補うような広域的な仕組みについても検討する。

②今年度開発した学習ユニットの実証

今年度開発したモデル・カリキュラム基準および達成度評価手法等を実効性あるものとするため、各ユニットの実証を行う。特に、本事業は異なる学校種が連携する体制のため、それぞれの学校種の強みをいかしつつ、どのユニットの、どのレベルを担当するかを定め、明確にする必要がある。学校種ごとに対応可能なユニットやレベルを定めるとともに、適切な評価主体、評価手法の検討を行う。

③モデル教材開発

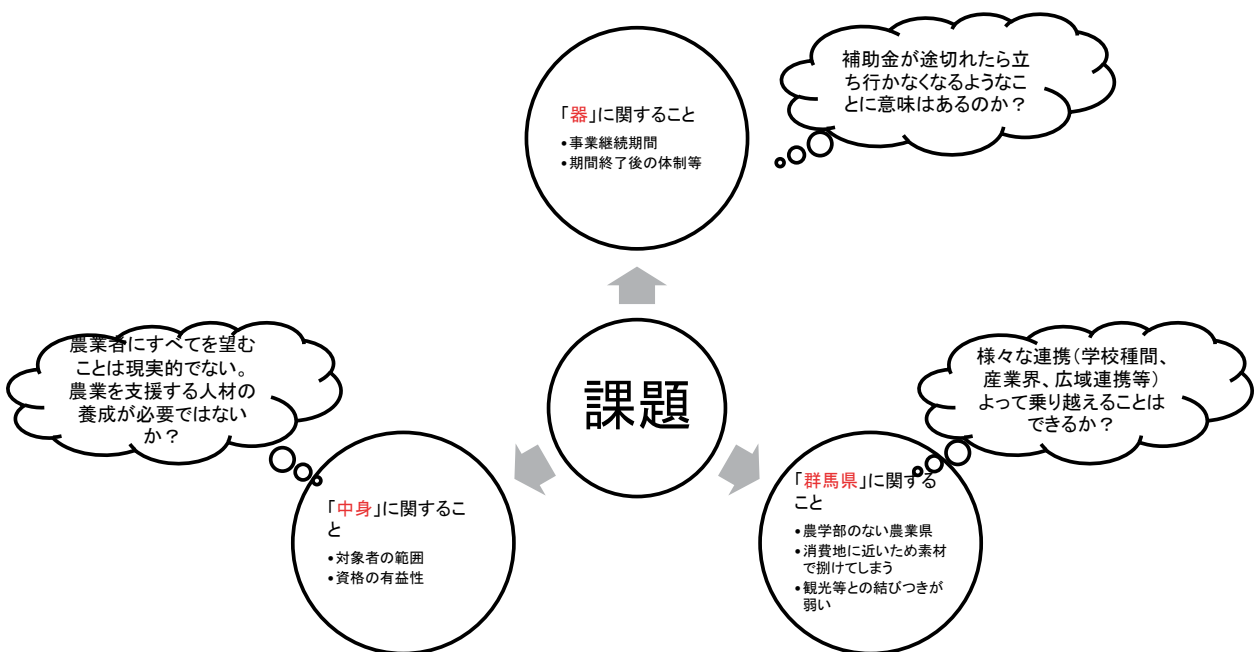
本事業で開発したプログラムを広域的に展開していくため、モデル・カリキュラム基準および

達成度評価手法等の確立に向け、検討を踏まえ開発する。また、プログラムの広域展開には、共通科目で用いるモデル教材や指導法の確立も欠かすことはできない。この点についても、教育界や産業界、広域連携機関とともに、モデル・カリキュラム基準および達成度評価手法等の確定に向けて開発する。

「産学連携による高度アグリビジネス人材育成プロジェクト」

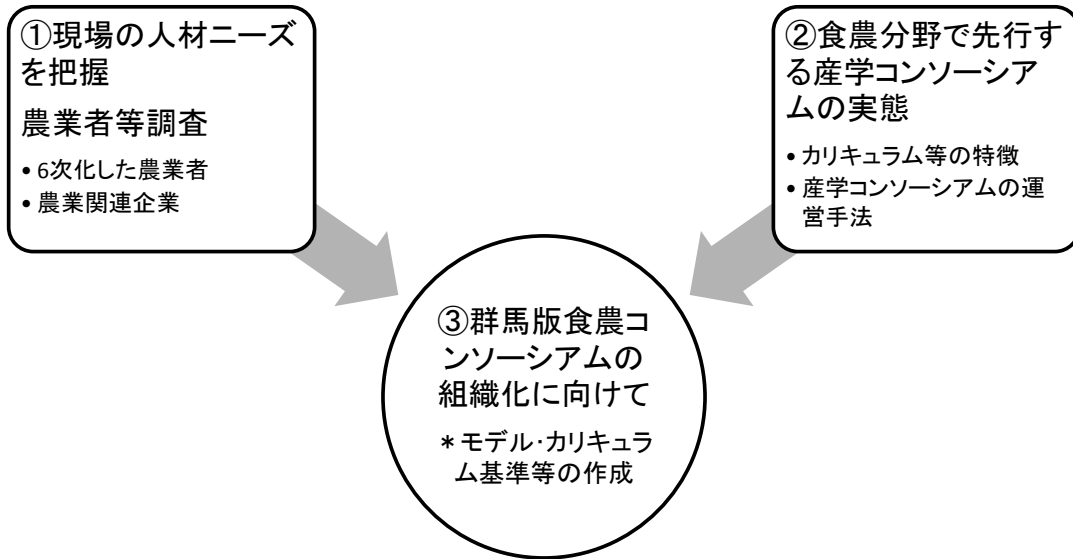
高崎経済大学

実施委員会で議論された課題



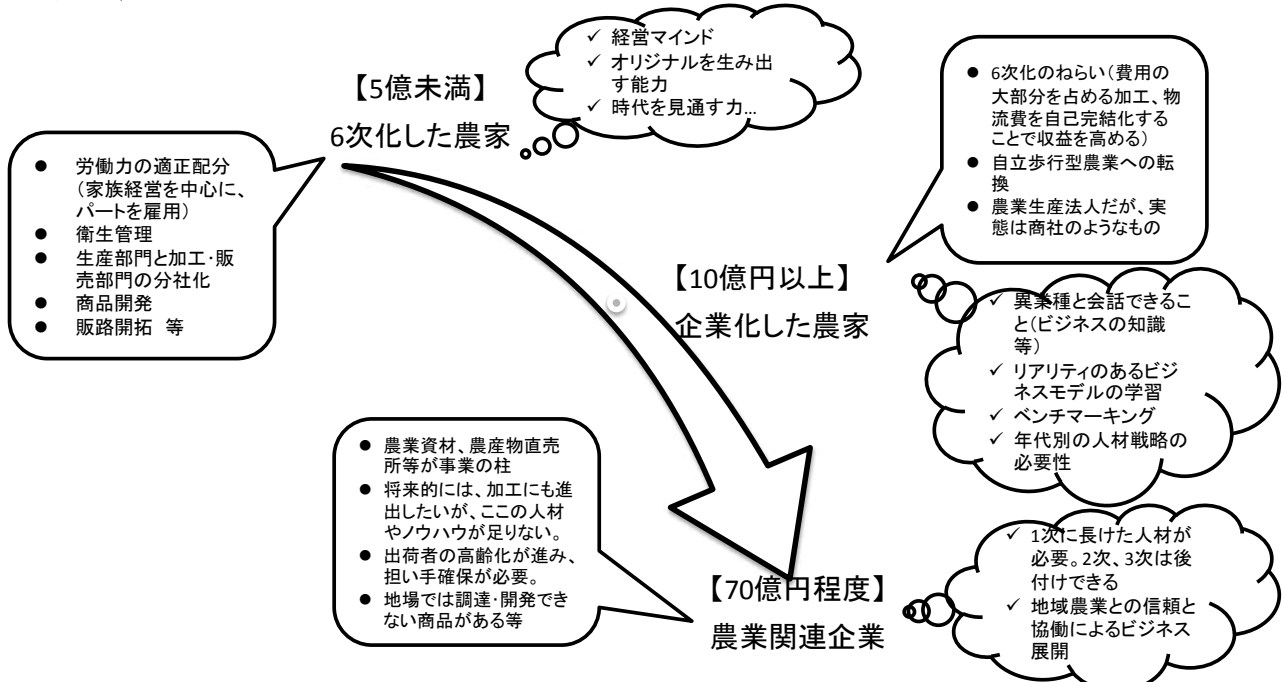
これらの課題をどのように克服していけばいいのか？

今年度の主な取り組み



実施委員会で出された課題をもとに、上記調査を実施。群馬版食農コンソーシアムの組織化に向け、モデル・カリキュラム基準等を作成。

【①現場の人材ニーズ】 食農分野で必要とされている能力



売上げの大きさに比例して、人材ニーズが変化する(後継者に求めること→従業員に求めること)。「ビジネス農業」の展開に必要な能力の育成が必要。

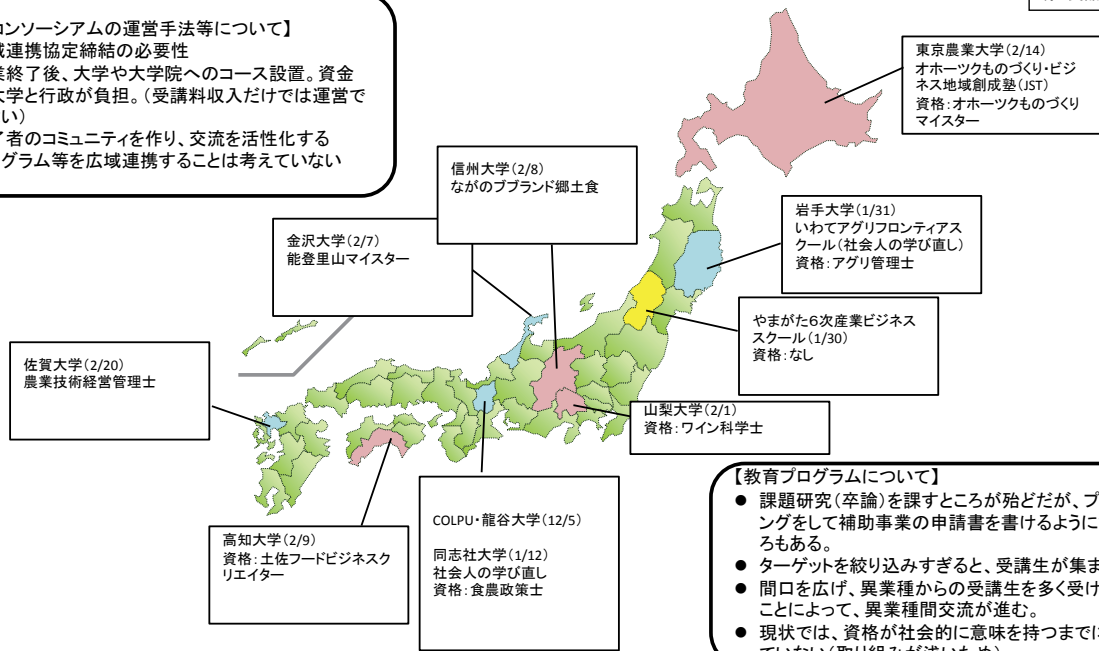
【②食農分野の産学コンソーシアム】 3つのカテゴリーに分類

(①農業者育成系、②6次産業系、③食品関連事業者育成系)

凡例
青：農業者育成系
黄：6次産業系
赤：食品企業系

【産学コンソーシアムの運営手法等について】

- 地域連携協定締結の必要性
- 事業終了後、大学や大学院へのコース設置。資金は大学と行政が負担。(受講料収入だけでは運営できない)
- 修了者のコミュニティを作り、交流を活性化させる
- プログラム等を広域連携することは考えていない



【教育プログラムについて】

- 課題研究(卒論)を課すところが殆どだが、プランニングをして補助事業の申請書を書くようにするところもある。
- ターゲットを絞り込みすぎると、受講生が集まらない。
- 間口を広げ、異業種からの受講生を多く受け入れることによって、異業種間交流が進む。
- 現状では、資格が社会的に意味を持つまでには至っていない(取り組みが浅いため)。

より大きな動きを生み出すためには食農分野のプログラムを幅広く集め、優れたところは共有化し、不足する部分は補い合うような広域連携体制が必要。

【③群馬版食農コンソーシアム】

食農分野におけるモデル・カリキュラム基準等のポイント(検討状況)



「成長分野等における中核的専門人材養成の戦略的推進」事業 モデル・カリキュラムのイメージ(食・農林水産分野)

アグリビジネスに必要な知識・技術・能力を、学校種を超えた教育機関・産業界・広域連携組織等の枠組みの中でステップアップしながら習得できる仕組みを構築する。学習者が学びやすいように、コース別、ユニット別に受講可能なカリキュラムとする。内閣府が進めるキャリア段階制度「食の6次産業化プロデューサー」と連動することで、さらに高みを目指す学習者にレベルアップの機会を提供する。

「ぐんま食農ビジネススクール」カリキュラム(案)

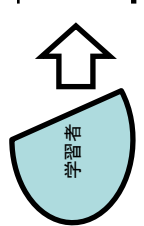
| Level (内閣府のキャリア段階制度の対応関係) | Basic (Level 1) | | Standard (Level 2) | | Advanced (Level 3) | |
|------------------------------|--|--|--|--|--|----------------------|
| | Unit1 | Unit2 | Unit3 | Unit4 | Unit5 | Unit6 |
| Unit 養成する能力 (アウトカム) | 現場を感じ、現実を知る | 外の世界を知り、参入するマーケットを見つける | ネットワークの創出 | 商品・流通・経営システムの開発 | ビジネスプランニング&プレゼンテーション | テスト・反省・改善 |
| 課題解決実践演習 | 【例1】 観光ビジネスユニット 【例2】 フードシステムユニット 【例3】 農業政策ユニット 【例4】 地域づくりユニット 【例5】 知的財産ユニット 【例6】 グローバル化への対応ユニット | | | | | |
| 群馬オリジナルコース | 【フィールド】 群馬の食と農を知る(郷土食、伝統芸能、農業構造等) 【高校・農林大学】 群馬の食と農を知る(安全・安心、機能性食品、スローフード) 【農林大学校】 農業経営の理念を知る(年間キャンパスプロジェクトと作業) | 【行政】 群馬、日本、世界の食と農を知る(広い視野から群馬の食と農を位置付ける) 【短大】 食のトレンドを知る(安全・安心、機能性食品、スローフード) 【大学】 ペンチマーキング(競合他社、産地から学ぶ) | 【行政】 群馬の食と農に関する人や組織を知る(仕組み、活用方法、課題等) 【短大・広域連携】 食と農に関わる業種を理解する(農産物や食品の流通構造等) | 【農協】 群馬を代表するブランド農産物や食品の産地を理解する 【広域連携機関】 生産から消費までを知る(プロダクト・プロセス・ロジスティクス) 【専門学校】 群馬をやる(役割、雇用、仕組み、任せ) | 【大学】 群馬のブランド力アップに向けて 【広域連携機関】 商業ベースに乗せるために必要となる 【大学】 ファイナンス・多角化(安定成長、持続的成長) 【大学】 農産物のマーケティング(農産物のマーケティング) | 【大学】 群馬のブランド力アップに向けて |
| プロダクト・プロセス・システムコース | 【フィールド】 群馬の食と農を知る(郷土食、伝統芸能、農業構造等) 【高校・農林大学】 群馬の食と農を知る(安全・安心、機能性食品、スローフード) 【農林大学校】 農業経営の理念を知る(年間キャンパスプロジェクトと作業) | 【行政】 群馬、日本、世界の食と農を知る(広い視野から群馬の食と農を位置付ける) 【短大】 食のトレンドを知る(安全・安心、機能性食品、スローフード) 【大学】 ペンチマーキング(競合他社、産地から学ぶ) | 【行政】 群馬の食と農に関する人や組織を知る(仕組み、活用方法、課題等) 【短大・広域連携】 食と農に関わる業種を理解する(農産物や食品の流通構造等) | 【農協】 群馬を代表するブランド農産物や食品の産地を理解する 【広域連携機関】 生産から消費までを知る(プロダクト・プロセス・ロジスティクス) 【専門学校】 群馬をやる(役割、雇用、仕組み、任せ) | 【大学】 群馬のブランド力アップに向けて 【広域連携機関】 商業ベースに乗せるために必要となる 【大学】 ファイナンス・多角化(安定成長、持続的成長) 【大学】 農産物のマーケティング(農産物のマーケティング) | 【大学】 群馬のブランド力アップに向けて |
| マネジメントコース | 【フィールド】 群馬の食と農を知る(郷土食、伝統芸能、農業構造等) 【高校・農林大学】 群馬の食と農を知る(安全・安心、機能性食品、スローフード) 【農林大学校】 農業経営の理念を知る(年間キャンパスプロジェクトと作業) | 【行政】 群馬、日本、世界の食と農を知る(広い視野から群馬の食と農を位置付ける) 【短大】 食のトレンドを知る(安全・安心、機能性食品、スローフード) 【大学】 ペンチマーキング(競合他社、産地から学ぶ) | 【行政】 群馬の食と農に関する人や組織を知る(仕組み、活用方法、課題等) 【短大・広域連携】 食と農に関わる業種を理解する(農産物や食品の流通構造等) | 【農協】 群馬を代表するブランド農産物や食品の産地を理解する 【広域連携機関】 生産から消費までを知る(プロダクト・プロセス・ロジスティクス) 【専門学校】 群馬をやる(役割、雇用、仕組み、任せ) | 【大学】 群馬のブランド力アップに向けて 【広域連携機関】 商業ベースに乗せるために必要となる 【大学】 ファイナンス・多角化(安定成長、持続的成長) 【大学】 農産物のマーケティング(農産物のマーケティング) | 【大学】 群馬のブランド力アップに向けて |
| マーケティングコース | 【フィールド】 群馬の食と農を知る(郷土食、伝統芸能、農業構造等) 【高校・農林大学】 群馬の食と農を知る(安全・安心、機能性食品、スローフード) 【農林大学校】 農業経営の理念を知る(年間キャンパスプロジェクトと作業) | 【行政】 群馬、日本、世界の食と農を知る(広い視野から群馬の食と農を位置付ける) 【短大】 食のトレンドを知る(安全・安心、機能性食品、スローフード) 【大学】 ペンチマーキング(競合他社、産地から学ぶ) | 【行政】 群馬の食と農に関する人や組織を知る(仕組み、活用方法、課題等) 【短大・広域連携】 食と農に関わる業種を理解する(農産物や食品の流通構造等) | 【農協】 群馬を代表するブランド農産物や食品の産地を理解する 【広域連携機関】 生産から消費までを知る(プロダクト・プロセス・ロジスティクス) 【専門学校】 群馬をやる(役割、雇用、仕組み、任せ) | 【大学】 群馬のブランド力アップに向けて 【広域連携機関】 商業ベースに乗せるために必要となる 【大学】 ファイナンス・多角化(安定成長、持続的成長) 【大学】 農産物のマーケティング(農産物のマーケティング) | 【大学】 群馬のブランド力アップに向けて |
| コミュニケーションコース | 【フィールド】 群馬の食と農を知る(郷土食、伝統芸能、農業構造等) 【高校・農林大学】 群馬の食と農を知る(安全・安心、機能性食品、スローフード) 【農林大学校】 農業経営の理念を知る(年間キャンパスプロジェクトと作業) | 【行政】 群馬、日本、世界の食と農を知る(広い視野から群馬の食と農を位置付ける) 【短大】 食のトレンドを知る(安全・安心、機能性食品、スローフード) 【大学】 ペンチマーキング(競合他社、産地から学ぶ) | 【行政】 群馬の食と農に関する人や組織を知る(仕組み、活用方法、課題等) 【短大・広域連携】 食と農に関わる業種を理解する(農産物や食品の流通構造等) | 【農協】 群馬を代表するブランド農産物や食品の産地を理解する 【広域連携機関】 生産から消費までを知る(プロダクト・プロセス・ロジスティクス) 【専門学校】 群馬をやる(役割、雇用、仕組み、任せ) | 【大学】 群馬のブランド力アップに向けて 【広域連携機関】 商業ベースに乗せるために必要となる 【大学】 ファイナンス・多角化(安定成長、持続的成長) 【大学】 農産物のマーケティング(農産物のマーケティング) | 【大学】 群馬のブランド力アップに向けて |

ユニットの並びは、ビジネスの順番に対応。各ユニットで養成する能力は、ビジネスの各段階で必要とされる中核的な能力。

下記の5コースで学んだスキルを活かして、特定の課題解決に向けて実践する演習。

群馬県が抱える食と農の問題について、学習者と関係者が互いに学び合い、協力しながら解決策を構築するためのコース。

アグリビジネスに必要なスキルを段階別に習得できるように配慮した、4つの基礎コース。



食農
コンソーシアム
資格授与

「ぐんま食農マイスター」
修了者

6次産業化や農商工連携等に対応可能な中核的専門人材を養成

- 【資格授与の要件】
- 5つのコースを修了し、かつ課題解決実践演習を修了した者には、食農コンソーシアムの評価委員会から「ぐんま食農マイスター」資格を授与される。
 - 各コースの修了者には、コース修了証明書授与(例:コミュニケーションコースのUnit1から5まで修了すると、「ぐんま食農マイスター」コミュニケーションコンソーシアム修了証明書が授与される)
 - 時間数は120時間程度を想定(1コマ3時間程度)
 - 単位については、履修証明を活用する。